需給動向

海外の畜産物の需給動向

牛　肉

米　国

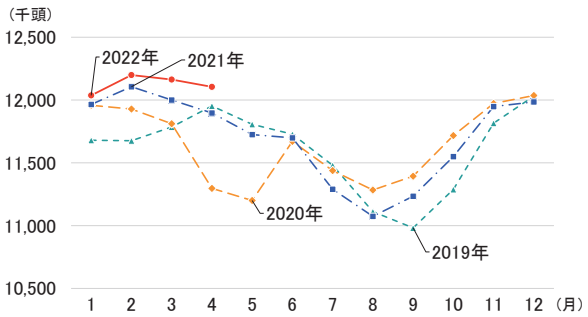
２月の牛肉輸出量、日本、韓国向けは減少も中国向けが増加

フィードロット飼養頭数、高水準で推移

米国農務省全国農業統計局（USDA/NASS）によると、2022年３月のフィードロット導入頭数は前年同月比0.4%減の199万頭、出荷頭数は同2.0%減の200万頭といずれも減少した。一方で、22年４月１日現在のフィードロット飼養頭数は、同1.7%増の1210万5000頭と４カ月連続で前年同月を上回り、依然として高い水準にある（図１）。22年第１四半期の実績を見ると、導入頭数は前年同期比2.3%増の584万2000頭、出荷頭数は同0.2%減の559万8000頭となった。また、フィードロット飼養頭数の内訳を見ると去勢牛と未経産牛の頭数が増えており、中でも未経産牛の割合（38%）が高水準となっている。現地報道によると、導入頭数の多さと未経産牛割合の上昇は、干ばつに伴い育成農家や繁殖農家における早期淘汰（とうた）が進み、多くの育成牛や後継牛（未経産牛）がフィードロットに出荷されている実態を示しているとしている。これらの結果、高いフィードロット飼養頭数となっている。

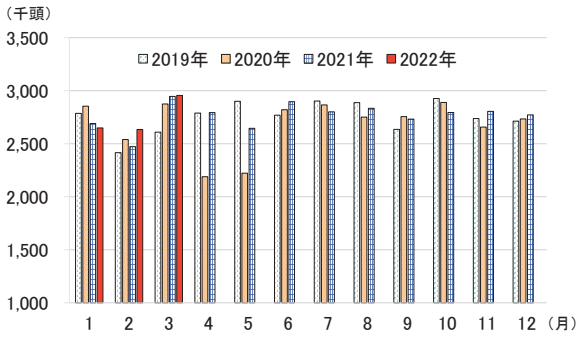
また、３月の牛と畜頭数は、フィードロットからの肥育牛の出荷頭数が減少しているにもかかわらず前年同月比0.3%増の295万5100頭となった。（図２）。これは、経産牛（肉用）のと畜頭数が同15.6%増となったことの影響が大きく、干ばつにより繁殖農家における淘汰が進んだ実態を示したものとみられる。

図１　フィードロット飼養頭数の推移



資料：USDA「Cattle on Feed」
注１：1000頭以上規模のフィードロットが対象。
注２：各月１日時点。

図２　牛と畜頭数の推移



資料：USDA「Livestock Slaughter」
注：連邦検査ベース。

２月の牛肉輸出量、中国向けが高水準で推移

USDA経済調査局（ERS）によると、2022年２月の牛肉輸出量は11万5406トン（前年同月比1.6%増）と前月からわずかに増加した（表１）。輸出先別に見ると、日本向けはまん延防止等重点措置適用による外食需要の停滞により同11.0%減（２万6760トン）、韓国向けは前月の輸出量の伸びが影響し同20.9%減（２万3937トン）とそれぞれ大きく減少した。一方で中国向けは、引き続き旺盛な輸入需要から同77.９%増（１万9569トン）と大幅に増加した。

米国食肉輸出連合会（USMEF）のホルストロム会長は、牛肉の好調な輸出が続いていることについて、「世界的な牛肉の供給不足が続く中、米国産食肉には海外の底堅い需要があり、既存市場と新興市場の両方で米国産牛肉の輸出はさらなる成長の可能性がある」とコメントしている。

表１　輸出先別牛肉輸出量の推移

（単位：トン）

	2021年２月	2022年２月	前年同月比（増減率）	シェア	2022年（１～２月）	前年同期比（増減率）
日本	30,066	26,760	▲11.0%	23.2%	53,425	▲5.9%
韓国	30,264	23,937	▲20.9%	20.7%	61,529	7.2%
中国	10,999	19,569	77.9%	17.0%	41,467	95.4%
メキシコ	11,855	10,416	▲12.1%	9.0%	19,616	▲25.8%
カナダ	8,185	9,538	16.5%	8.3%	18,526	▲7.7%
台湾	5,345	7,423	38.9%	6.4%	17,100	58.6%
香港	5,940	2,708	▲54.4%	2.3%	5,030	▲51.9%
コロンビア	272	1,170	330.3%（約4.3倍）	1.0%	2,253	135.2%（約2.4倍）
その他	10,630	13,884	30.6%	12.0%	26,932	28.0%
合計	113,557	115,406	1.6%	100.0%	245,877	9.2%

資料：USDA「Livestock and Meat International Trade Data」
注：枝肉重量ベース。

２月の牛肉輸入量、過去最高を記録

また、2022年２月の牛肉輸入量は、ブラジル産牛肉の大幅な増加にけん引され12万6512トン（前年同月比40.5%増）となった（表２）。３月の輸入実績は未公表であるが、４月６日に米国税関国境保護局が公表した資料によると、22年の米国の低関税枠（６万5005トン）については、３月28日に上限に達している。このため、今後はブラジル産牛肉を含め、独自の関税割当のない輸入牛肉に対して26.4%の関税が適用されることとなる。

表２　輸入先別牛肉輸入量の推移

（単位：トン）

	2021年２月	2022年２月	前年同月比（増減率）	シェア	2022年（１～２月）	前年同期比（増減率）
カナダ	28,518	32,333	13.4%	25.6%	66,045	13.5%
メキシコ	21,510	29,184	35.7%	23.1%	58,906	47.9%
ブラジル	5,849	25,509	336.2%（約4.4倍）	20.2%	70,846	445.4%（約5.5倍）
豪州	7,626	10,959	43.7%	8.7%	29,654	26.0%
NZ	13,347	14,384	7.8%	11.4%	29,140	▲9.4%
その他	13,203	14,142	7.1%	11.2%	31,551	25.6%
合計	90,053	126,512	40.5%	100.0%	286,142	49.1%

資料：USDA「Livestock and Meat International Trade Data」
注：枝肉重量ベース。

（調査情報部　伊藤　瑞基）

ＥＵ

牛飼養頭数の減少から22年の牛肉生産量は減少見込み

2021年の牛肉生産量、前年比0.4%減

欧州委員会によると、2021年の牛肉生産量（EU27カ国）は、679万7360トン（前年比0.4%減）となった（表１）。同年の牛肉生産量を国別に見ると、イタリア（同2.1%増）、スペイン（同6.1%増）が増加となった一方で、フランス（同0.7%減）、ドイツ（同2.3%減）、アイルランド（同6.1%減）などで減少した。米国農務省の分析によると、21年第４四半期の牛枝肉卸売価格と飼料価格の上昇からと畜頭数が増加したことで、21年のと畜頭数は前年を上回る数字（同0.5%増）になったとしている。しかし、飼料価格など生産費の上昇を避けた早期出荷も多かったことで１頭当たりの枝肉重量が減少し（同0.9%減）、同年の牛肉生産量は前年を下回った。

また、21年12月調査のEUの牛飼養頭数（乳用牛を含む）は、7565万490頭（同1.1%減）と５年連続で前年を下回った（図）。ここ数年上昇している飼料価格などを要因に牛飼養頭数は減少基調にある。

欧州委員会は、４月５日に公表した農畜産物の短期的需給見通しの中で、多くの加盟国

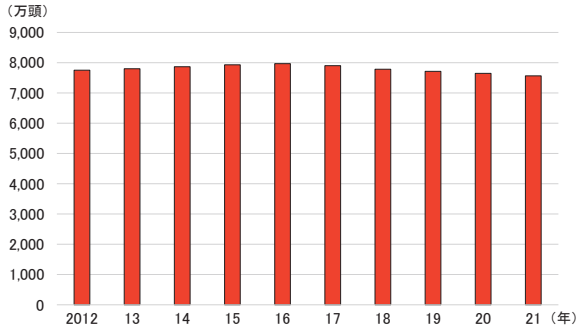
表１　主要生産国別牛肉生産量の推移

（単位：千トン）

	2020年	2021年	前年比（増減率）
フランス	1,435	1,424	▲ 0.7%
ドイツ	1,090	1,065	▲ 2.3%
イタリア	732	748	2.1%
スペイン	678	719	6.1%
アイルランド	633	595	▲ 6.1%
ポーランド	559	555	▲ 0.8%
オランダ	433	430	▲ 0.8%
その他	1,262	1,262	0.0%
合計	6,822	6,797	▲ 0.4%

資料：欧州委員会「Eurostat」
注：枝肉重量ベース。

図　EUの牛飼養頭数の推移



資料：欧州委員会「Eurostat」
注１：各年12月時点。
注２：乳用種を含む。

で新型コロナウイルス感染症（COVID-19）に関する規制が解除され、外食需要の回復に伴い牛肉価格の上昇が見込まれているとした。その一方で、22年の牛肉生産量は、肉牛および酪農部門での牛群再構築が続くため減少すると見込まれている。また、飼料価格の上昇は、早期出荷によると畜頭数の増加や枝肉重量の減少に繋がる可能性があるとし、特に購入飼料の利用比重が高い舎飼いの肉牛農家では、収支への負の影響が見込まれている。

2021年の英国への冷蔵牛肉輸出は大幅に減少

2021年のEUの牛肉輸出量は45万6883トン（前年比1.8%減）とわずかに減少した（表２）。そのうち、冷蔵牛肉は25万282トン（同8.9%減）とかなりの程度減少したものの、冷凍牛肉は20万6601トン（同8.3%増）とかなりの程度増加した。冷蔵牛肉では、ボスニア･ヘルツェゴビナ向け、スイス向け、ノルウェー向けなどが増加したが、最大の輸出先である英国向けの減少分を埋め合わせるまでには至らなかった。一方で、冷凍牛肉は英国向けやフィリピン向けなどが増加する中で、特に日本向けは、同88.8%増と大幅に増加した。

前述の見通しによると、22年のEUの牛肉

表２　EUの輸出先別牛肉輸出量の推移

（単位：トン）

品目	輸出先	2020年	2021年	前年比（増減率）
冷蔵	英国	183,390	149,892	▲ 18.3%
	ボスニア・ヘルツェゴビナ	27,668	32,636	18.0%
	スイス	16,550	18,940	14.4%
	ノルウェー	11,382	15,825	39.0%
	その他	35,687	32,989	▲ 7.6%
	合計	274,677	250,282	▲ 8.9%
冷凍	英国	54,642	63,301	15.8%
	フィリピン	19,562	23,316	19.2%
	香港	20,089	17,031	▲ 15.2%
	日本	6,833	12,901	88.8%
	その他	89,619	90,052	0.5%
	合計	190,745	206,601	8.3%
冷蔵・冷凍計		465,422	456,883	▲ 1.8%

資料：「Global Trade Atlas」
注：冷蔵のHSコードは0201、冷凍のHSコードは0202。

輸出は、EU域内からの供給量が限られるため、世界市場での供給不足により牛肉価格が上昇しているにもかかわらず、21年と比較してわずか１％の増加にとどまると見込まれている。

（調査情報部　小林　智也）

豪　州

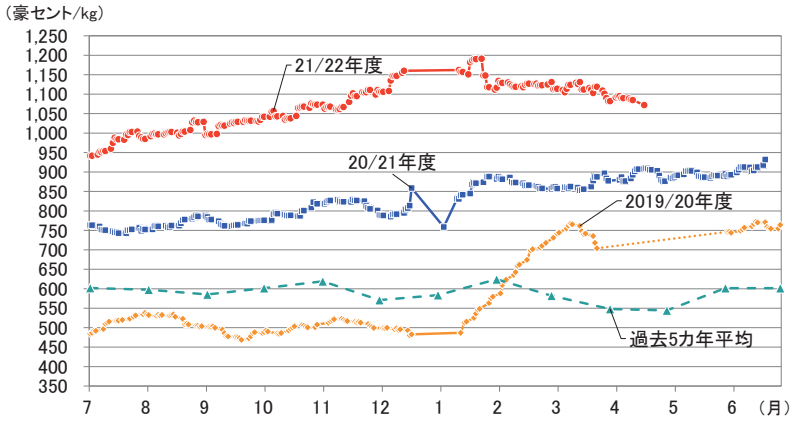
牛肉輸出量、近年にない低水準で推移

取引頭数の減少により肉牛価格は下落

豪州肉牛生体取引価格の指標となる東部地区若齢牛指標（EYCI）価格は続落し、2022年４月19日時点で１キログラム当たり1072豪セント（1004円：１豪ドル＝93.70円(注1)）となった（図）。この動きは、牛群再構築の進展の影響も考えられるが、豪州食肉家畜生産者事業団（MLA）によると、特に豪州の祝日（４月15日のグッドフライデー、４月18日のイースターマンデー）の影響で、食肉加工施設の稼働率が低下することに伴い、家畜市場の取引頭数が減少したことも価格下落要因として考えられる。

（注１）　三菱UFJリサーチ＆コンサルティング株式会社「月末・月中平均の為替相場」の2022年４月末TTS相場。

図　EYCI価格の推移



資料：MLA
注１：年度は７月～翌６月。
注２：東部地区若齢牛指標（EYCI）価格は、東部３州（クイーンズランド州、ニューサウスウェールズ州、ビクトリア州）の主要家畜市場における若齢牛の加重平均取引価格で、家畜取引の指標となる価格。肥育牛や経産牛価格とも相関関係にある。
注３：2020年３月26日～６月１日の間は、新型コロナウイルス感染症の影響でEYCI価格の集計を実施していない。

豪雨による物流混乱などにより、牛肉輸出量は引き続き停滞

豪州農業･水･環境省（DAWE）によると、2022年３月の牛肉輸出量は７万4348トン（前年同月比10.9%減）とかなりの程度減少し、同年の第１四半期（１～３月）の累計でも17万7223トン（前年同期比11.3%減）とかなり大きく減少した（表）。現地報道によると、第１四半期の輸出量は、過去10年

間の平均値である24万1000トンを27%も下回ったとしている。この要因として、牛群再構築による牛肉生産量の停滞に加え、同年１月に新型コロナウイルスのオミクロン株感染拡大に伴い、一部の食肉加工施設で人員不足により生産に支障を来したことや、２月下旬から３月にかけての記録的な豪雨により物流が滞り、牛肉輸出の主要港となっているブリスベン港が一時稼働停止となったことなどが挙げられている。

輸出先別に見ると、最大の輸出先である日本向けは２万83トン（前年同月比0.2%減）と前年同月並みとなり、同年累計では４万6529トン（前年同期比8.0%減）とかなりの程度減少した。現地報道によると、日豪EPAや環太平洋パートナーシップに関する包括的及び先進的な協定（CPTPP）に基づき、４月から豪州産牛肉の関税が段階的に引き下げられることにより、通常、関税引き下げ前の毎年３月の日本向け輸出量は低水準になる傾向があるとしている。

中国向けは、牛肉輸出が停止されている豪州の食肉加工施設が８カ所ある(注2)にもかかわらず、１万3483トン（前年同月比9.7%減）、同年累計でも３万3794トン（前年同期比5.5%減）と減少したのみで、引き続き日本に次ぐ輸出量となっている。

（注２）『畜産の情報』2022年４月号「肉牛取引価格、牛群再構築の進展により下落傾向」（https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002065.html）を参照されたい。

表　輸出先別牛肉輸出量の推移

（単位：トン）

	2021年３月	2022年３月	前年同月比（増減率）	2022年（１～３月）	前年同期比（増減率）
日本	20,130	20,083	▲ 0.2%	46,529	▲ 8.0%
中国	14,929	13,483	▲ 9.7%	33,794	▲ 5.5%
韓国	15,682	13,187	▲ 15.9%	33,039	▲ 8.8%
米国	12,680	11,142	▲ 12.1%	26,925	▲ 8.8%
東南アジア	10,646	8,400	▲ 21.1%	17,123	▲ 28.2%
中東	2,820	1,659	▲ 41.2%	4,437	▲ 44.1%
EU	610	398	▲ 34.7%	1,662	▲ 20.6%
その他	5,942	5,996	0.9%	13,715	▲ 1.5%
輸出量合計	83,438	74,348	▲ 10.9%	177,223	▲ 11.3%

資料：DAWE
注１：船積重量ベース。
注２：東南アジアは、フィリピン、タイ、マレーシア、シンガポール、インドネシアの合計。
注３：中東は、イラン、イラク、シリア、レバノン、ヨルダン、イスラエル、サウジアラビア、クウェート、バーレーン、カタール、オマーン、イエメン、エジプト、パレスチナ自治区、アラブ首長国連邦を構成する七つの首長国のうち四つの首長国（アブダビ、ドバイ、フジャイラ、ラアス・アル＝ハイマ）の合計。

（調査情報部　国際調査グループ）

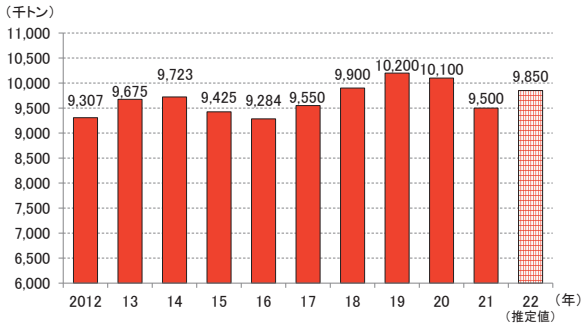
ブラジル

2021年の牛肉輸出量、７年ぶりに前年を下回る

2022年の牛肉生産量は３年ぶりに増加の見込み

米国農務省海外農業局（USDA/FAS）によると、2021年のブラジルの牛肉生産量は950万トン（前年比5.9%減）と、２年連続で減少した（図１）。これは、18~19年に旺盛な輸出需要などを受けて雌牛がと畜に回された結果、と畜仕向けの頭数が減少したためである。しかしながら、22年の牛肉生産量は985万トン（同3.7%増）と３年ぶりに増加に転じると見込まれている。これは、牛肉の国際価格が高水準で推移していることやと畜仕向け頭数が回復していることなどが要因とみられる。

図１　牛肉生産量の推移



資料：USDA
注１：枝肉重量ベース。
注２：2022年は推定値。

21年の牛肉輸出、中国向け輸出停止措置が大きく影響

ブラジル経済省貿易局（SECEX）によると、2021年の牛肉輸出量は156万198トン（前年比9.5%減）と７年ぶりに前年を下回った（表）。これは、同年９月４日にブラジルで非定型BSEの発生が確認され、一時的に中国向けなどに輸出制限措置が講じられたためである。なお、輸出額については、旺盛な牛肉需要から単価が大幅に上昇したことで前年を上回った。

輸出の内訳を見ると、中国向けは同年12月15日に全面的に輸出が再開されるまで約３カ月間制限されたことから、72万3170

表　牛肉輸出の推移

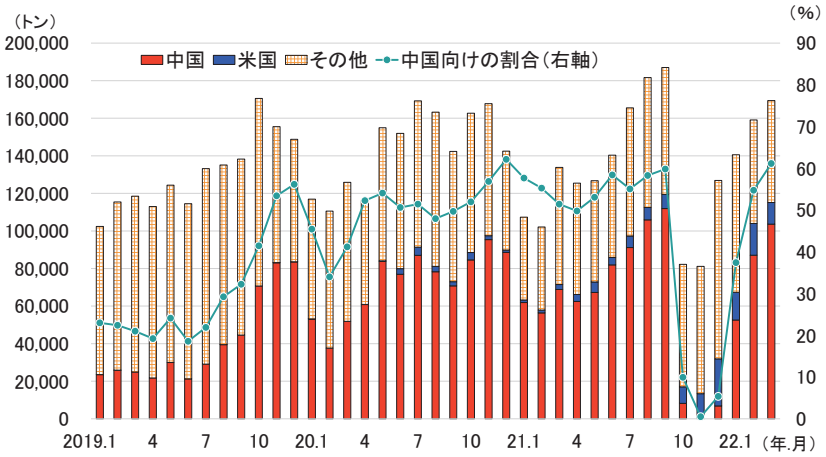
区分	2020年			2021年			前年比（増減率）		
	輸出量（トン）	輸出額（千米ドル）	単価（米ドル/トン）	輸出量（トン）	輸出額（千米ドル）	単価（米ドル/トン）	輸出量	輸出額	単価
中国	868,703	4,037,512	4,648	723,170	3,906,641	5,402	▲16.8%	▲3.2%	16.2%
香港	208,182	811,370	3,897	132,823	586,893	4,419	▲36.2%	▲27.7%	13.4%
チリ	89,981	374,487	4,162	110,198	563,182	5,111	22.5%	50.4%	22.8%
米国	20,096	96,071	4,781	85,800	465,296	5,423	327.0%（約4.3倍）	384.3%（約4.8倍）	13.4%
エジプト	117,839	394,975	3,352	65,096	270,628	4,157	▲44.8%	▲31.5%	24.0%
アラブ首長国連邦	38,978	154,601	3,966	47,609	211,504	4,443	22.1%	36.8%	12.0%
フィリピン	39,224	133,077	3,393	45,894	192,268	4,189	17.0%	44.5%	23.5%
サウジアラビア	39,853	158,444	3,976	39,336	181,388	4,611	▲1.3%	14.5%	16.0%
その他	301,550	1,286,349	4,266	310,272	1,589,605	5,123	2.9%	23.6%	20.1%
合計	1,724,406	7,446,886	4,319	1,560,198	7,967,403	5,107	▲9.5%	7.0%	18.3%

資料：SECEX
注１：HSコード0201（冷蔵牛肉）、0202（冷凍牛肉）の合計。
注２：製品重量ベース。

トン（同16.8%減）と前年を大幅に下回った。一方、20年２月に輸出が再開された米国向けは、特に中国の輸出制限後に輸出が加速し、８万5800トン（同4.3倍）と、中国、香港、チリに次ぐ４番目の輸出先となった。

なお、中国向けは、輸出制限措置解除後に輸出量が回復する一方、米国向けも高水準で推移している。このため、22年１～３月の輸出量は46万9026トン（前年同期比36.6%増）と前年を大幅に上回っている（図２）。

図２　牛肉輸出量および全体に占める中国向け割合の推移



資料：SECEX
注：中国向け輸出量および割合はいずれも香港を含まない。

肥育牛価格は高値で推移

サンパウロ大学応用経済研究所（CEPEA）によると、2021年の肥育牛価格は、飼料など生産費の上昇などの影響で上昇し、１キログラム当たり20レアル（534円：１レアル=26.69円(注)）前後で推移した（図３）。同年10月には、中国向けなどの輸出制限により同17レアル（454円）程度まで下落したもののその後回復し、直近22年４月25日時点では同21.93レアル（585円）と高値で推移している。

（注）　三菱UFJリサーチ＆コンサルティング株式会社「月末・月中平均の為替相場」2022年4月末TTS相場。

図３　肥育牛価格の推移

資料：CEPEA

（調査情報部　井田　俊二）

豚　肉

米　国

飼養頭数の減少は今後も続く見込み

飼養頭数、ほぼすべてのカテゴリーで前年比減

米国農務省全国農業統計局（USDA/NASS）によると、2022年３月１日時点の豚総飼養頭数は、7220万9000頭（前年比2.3%減）となった（表１）。豚飼養頭数を左右する12月～翌２月期の１腹当たりの産子数は同0.1%増となったが、分娩母豚頭数が同1.0%減少したことで産子数も同1.0%減となった。USDAによると、22年３～５月期および６～８月期の分娩予定母豚頭数も前年同期比減と予測していることから、今後も肥育豚頭数の増加は見込めず、豚肉の供給減少は続くとみられる。USDA/NASSは、分娩予定母豚を含む繁殖豚頭数の減少は、飼料や燃料、医薬品などの生産コスト上昇に加えて、カリフォルニア州法(注1)への対応など中長期的な取り組みに関し、市場環境リスクと不確実性に対する生産者の反応を反映したものと分析している。

（注１）　海外情報「母豚の飼育環境規制強化に関するカリフォルニア州法の施行が停止（米国）」（https://www.alic.go.jp/chosa-c/joho01_003178.html）を参照されたい。

表１　豚飼養頭数の推移

（単位：千頭）

	2020年	2021年	2022年	前年比（増減率）
総飼養頭数（3月1日時点）	76,179	73,933	72,209	▲ 2.3%
繁殖豚	6,375	6,215	6,098	▲ 1.9%
肥育豚	69,804	67,718	66,111	▲ 2.4%
50ポンド（23キログラム）未満	21,571	20,238	20,045	▲ 1.0%
50～119ポンド（23～53キログラム）	19,353	19,138	18,765	▲ 1.9%
120～179ポンド（54～81キログラム）	15,086	15,375	14,833	▲ 3.5%
180ポンド（82キログラム）以上	13,793	12,966	12,468	▲ 3.8%
分娩母豚頭数（12月～翌2月）	3,182	2,929	2,901	▲ 1.0%
産子数（12月～翌2月）	35,016	32,059	31,750	▲ 1.0%
1腹当たり産子数（12月～翌2月）（頭）	11.00	10.94	10.95	0.1%

資料：USDA「Hogs and Pigs」
注１：計数は、四捨五入のため、合計において一致しない場合がある。
注２：産子数には事故などで死亡した子豚を含まない。

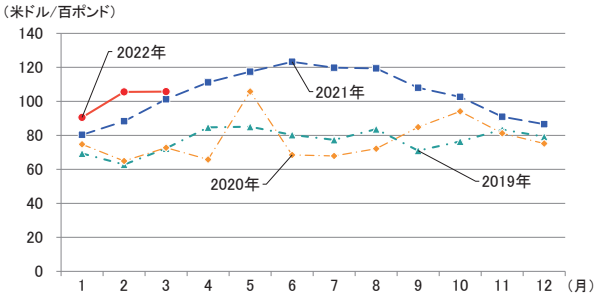
卸売価格の上昇率は鈍化

USDA農業マーケティング局（AMS）によると、2022年３月の豚肉卸売価格は100ポンド当たり105.73米ドル（１キログラム当たり302.70円：１米ドル＝129.86円(注2)、前年同月比4.4%高）となった（図）。豚肉卸売価格は21年から前年同月を上回って推

移してきたが、直近の１、２月が10%を超える上昇率であったのに対し、３月の上昇率は4.4%と鈍化している。これについてUSDAは、国内外からの需要が減少したことを示していると分析している。

（注２）　三菱UFJリサーチ＆コンサルティング株式会社「月末・月中平均の為替相場」の2022年４月末TTS相場。

図　豚肉卸売価格の推移



資料：USDA「Livestock & Meat Domestic Data」
注：カットアウトバリュー。

２月の輸出量は大幅に減少

USDA経済調査局（ERS）によると、2022年２月の豚肉輸出量は22万600トン（前年同月比17.9%減）と大幅に減少した（表２）。減少の一因として、昨年から続く中国からの輸入需要の減退が挙げられるが、中国国内の豚肉需給が緩和する中で、この傾向は今後も続くと予想される。日本を含め主要輸出先への輸出量が減少している中、メキシコ向けは同41.5%増と大幅に増加した。USDAは、ドル/ペソ相場が１月以降安定していることに加え、メキシコ向け主要輸出品目である骨付きモモの価格が前年同期を下回っていることから、今後もメキシコへの輸出は堅調に推移するであろうと予測している。一方で、米国産豚肉価格の上昇は、港湾の混雑と輸送コストの上昇も相まって、特にアジア向け輸出需要の減少につながるのではないかという懸念も示している。

表２　輸出先別豚肉輸出量の推移

（単位：千トン）

	2021年（１～２月）	2022年２月	前年同月比（増減率）	シェア	2022年（１～２月）	前年同期比（増減率）
メキシコ	124.4	82.0	41.5%	37.2%	181.0	45.5%
日本	90.7	44.7	▲0.5%	20.3%	80.8	▲10.9%
中国・香港	130.0	19.0	▲70.4%	8.6%	38.8	▲70.1%
韓国	41.9	18.4	▲4.2%	8.3%	40.5	▲3.4%
カナダ	41.9	17.1	▲19.4%	7.8%	34.6	▲17.4%
コロンビア	20.7	9.0	▲25.3%	4.1%	16.9	▲18.2%
ドミニカ共和国	14.4	7.1	▲1.5%	3.2%	15.3	6.8%
その他	79.4	23.2	▲44.4%	10.5%	44.1	44.5%
合計	543.4	220.6	▲17.9%	100.0%	452.0	▲16.8%

資料：USDA「Livestock and Meat Internationall Trade Data」
注：枝肉重量ベース。

（調査情報部　上村　照子）

カナダ

食肉処理場の稼働率の低下により飼養頭数増加

豚総飼養頭数は前年比0.6%増

カナダ統計局が公表した2022年１月１日現在の豚飼養頭数によると、同国全体で1411万頭（前年比0.6%増）となった（表１）。内訳を見ると、肥育豚のうち81キログラム以上の頭数の伸びが目立っているが、同局は、食肉処理場の稼働率低下により養豚生産者に肥育豚が滞留したことが要因と分析している。

表１　豚飼養頭数の推移

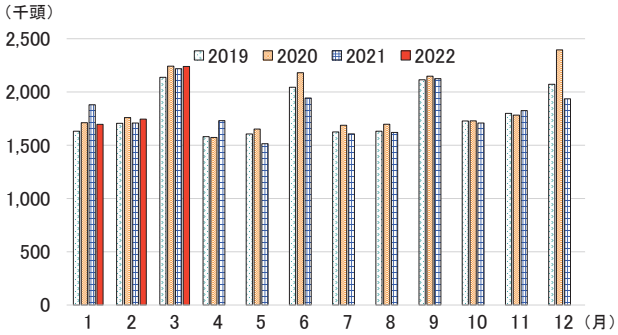
（単位：千頭）

		2019年	2020年	2021年	2022年	前年比（増減率）
繁殖豚		1,253.5	1,244.4	1,257.0	1,261.4	0.4%
肥育豚		12,721.5	12,725.6	12,773.0	12,848.6	0.6%
	23kg未満	5,180.3	5,220.8	5,129.4	5,171.4	0.8%
	23 ～ 53kg	2,389.1	2,427.7	2,512.9	2,516.5	0.1%
	54 ～ 80kg	2,519.2	2,514.8	2,456.8	2,456.5	▲0.0%
	81kg以上	2,632.9	2,562.3	2,673.9	2,704.2	1.1%
合計		13,975.0	13,970.0	14,030.0	14,110.0	0.6%

資料：Statistics Canada（カナダ統計局）
注：各年１月１日現在。

カナダ国内では、労働力不足が深刻な問題となっており、特に食肉処理場をはじめとする食品製造業での労働力不足が顕著とされている。また、食肉処理場でのストライキやCOVID-19の流行などが重なったことから、21年のと畜頭数は前年比3.3%減となった（図）。ただし、22年２月からは前年同月を上回ると畜頭数で推移しており、労働力問題に関してカナダ政府も外国人労働者の入国規制緩和などの実施に動いていることから、今後は安定して推移するとみられる。

図　豚と畜頭数の推移



資料：AAFC（カナダ農務・農産食品省）「Hog Slaughterings at Federally and/or Provincially Inspected Packing Plants」

22年の米国向け生体豚輸出は堅調と予測

豚飼養頭数が増加する中で、2021年の米国への生体豚輸出は、国内での食肉処理の停滞と米国の高い需要により前年比26.0%増と堅調に推移した。22年のカナダの生体豚輸出について米国農務省海外農業局（USDA/FAS）は、肥育もと豚の輸出は21年と同様、堅調に推移すると予想している。また、肥育豚については、ケベック州での肥育豚の滞留が第１四半期に解消されるため前年比で減少するものの、カナダ国内の大手食

肉処理施設の処理頭数縮小により、依然堅調な輸出が維持されると予測している。

中国向け輸出量の減少が顕著

カナダ統計局によると、2022年２月の豚肉輸出量は９万5800トン（前年同月比3.3%減）とやや減少した（表２）。輸出先別に見ると、中国向けは１万5800トン（同48.9%減）と大きく減少した。これは、中国の輸入豚肉需要の後退に加え、カナダ国内の中国向け食肉処理場で作業員にCOVID-19が確認されたことから、同国向けの輸出停止が続いていることが影響している。一方で、豚肉生産量が減少傾向にある米国向けは２万9500トン（同68.3%増）、経済の回復により豚肉需要が好調なメキシコ向けは１万200トン（同56.7%増）と、いずれも大幅に増加した。

また、USDA/FASによると、21年のカナダの年間豚肉輸出量は減少しているものの、輸出額が増加していることから、付加価値の高い製品の輸出が増えていることがうかがえるとしている。

表２　輸出先別豚肉輸出量の推移

（単位：千トン）

	2021年２月	2022年２月	前年同月比（増減率）	シェア	2021年（１～12月）	前年比（増減率）	シェア
米国	17.5	29.5	68.3%	30.8%	285.1	32.7%	25.0%
中国	30.9	15.8	▲48.9%	16.5%	260.3	▲50.6%	22.8%
日本	15.9	12.9	▲18.6%	13.5%	208.1	▲6.3%	18.2%
フィリピン	13.4	12.1	▲9.6%	12.6%	101.4	174.3%	8.9%
メキシコ	6.5	10.2	56.7%	10.7%	137.4	98.3%	12.1%
その他	14.7	15.2	3.0%	15.8%	148.0	22.5%	13.0%
合計	99.0	95.8	▲3.3%	100.0%	1,140.4	▲4.3%	100.0%

資料：Statistics Canada（カナダ統計局）
注１：HSコード0203。
注２：製品重量ベース。

（調査情報部　上村　照子）

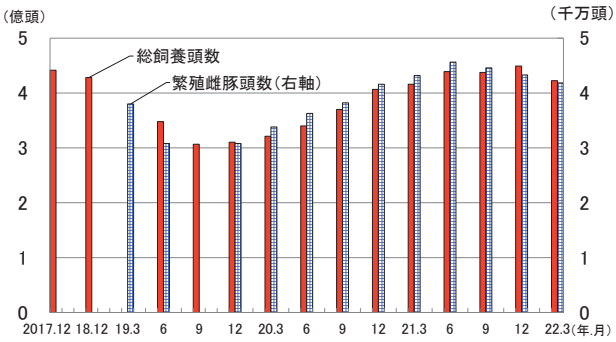
中　国

豚飼養頭数減少も、生体豚価格はいまだ低水準で推移

豚総飼養頭数、繁殖雌豚頭数ともに減少傾向

中国国家統計局によると、2022年３月末時点の豚総飼養頭数（四半期ごとに公表）は、前回（21年12月末）比5.9%減の４億2253万頭、うち繁殖雌豚頭数は同3.3%減の4185万頭と昨年６月末をピークに減少している（図１）。なお、中国農業農村部は、繁殖雌豚の飼養頭数について約4100万頭が最適（下限は3700万頭）としており、現時点ではこの頭数に対し2.1%上回っている状況にある。

図１　豚飼養頭数の推移

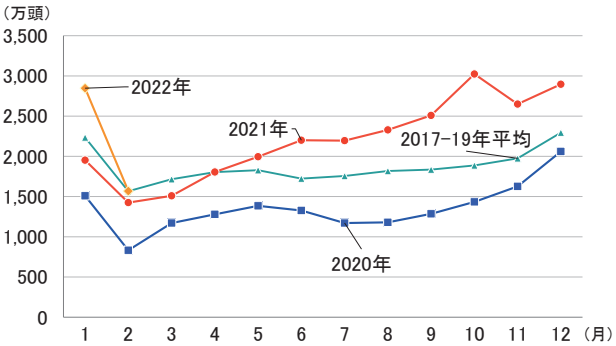


資料：中国国家統計局
注：四半期ごとの公表値。

豚と畜頭数と豚肉生産量は引き続き高水準で推移

中国農業農村部によると、豚と畜頭数は引き続き前年同月を上回る水準で推移している。2022年２月は春節後に需要が一服したことで前月比44.9%減と大幅に減少したが、前年同月比では10.1%増（1568万頭）と前年をかなりの程度上回った（図２）。

図２　豚と畜頭数の推移



資料：中国農業農村部
注：年間２万頭以上処理すると畜場でのと畜頭数（全体のと畜頭数の約３割）。

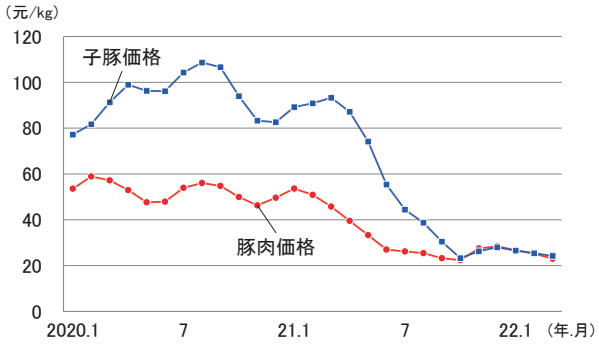
豚と畜頭数が高水準で推移することで、豚肉生産量も引き続き前年を上回っている。中国国家統計局によると、22年第１四半期の豚肉生産量は前年同期比14%増の1561万トンとなった。

22年１月以降、豚肉価格、子豚価格ともに下落傾向で推移

2022年１月以降、豚肉価格および子豚価格は下落傾向にあり、３月の豚肉価格は前月比9.1%安の１キログラム当たり23元（457円：１元＝19.86円(注１)）、子豚価格は同4.6%安の同24.2元（481円）となった（図３）。１月以降、春節需要を見越した出荷の集中やCOVID-19による都市封鎖、さらに、春節後の需要減も重なり、価格下落を引き起こしたとされている。なお、政府は、豚肉価格および生体豚価格を下支えするため、３月以降、国家備蓄による豚肉の買い入れを複数回実施している(注２)。

（注１）　三菱UFJリサーチ＆コンサルティング株式会社「月末・月中平均の為替相場」の2022年４月末TTS相場。
（注２）　海外情報「豚肉価格の低迷で、備蓄に向けた国家買入を再度実施（中国）」（https://www.alic.go.jp/chosa-c/joho01_003222.html）および「豚価格の低迷で、3月に続き国家買入を実施（中国）」（https://www.alic.go.jp/chosa-c/joho01_003234.html）を参照されたい。

図３　豚肉および子豚価格の推移



資料：中国農業農村部

22年１～３月の豚肉輸入量は前年同期比で大幅に減少

2022年１～３月の豚肉輸入量は、前年同期比63.9%減（41万2228トン）と大幅に減少した（表）。昨年同時期は、アフリカ豚

熱の影響から輸入豚肉の需要が大きかったが、中国国内の豚肉生産の回復に伴い主要輸入先からの輸入量は総じて前年を下回っている。今後の見通しとして、繁殖雌豚頭数はいまだに高水準にある中で、COVID-19による都市封鎖の散発を受けて輸入業者の輸入意欲は低下しているとされ、輸入量は引き続き少ない状況が継続するとみられている。

表　主要輸入先別豚肉輸入量の推移

（単位：万トン）

	2018年	2019年	2020年	2021年	2022年（1～3月）	前年同期比（増減率）
スペイン	22.0	38.2	93.4	109.8	12.5	▲ 67.2%
ブラジル	15.0	22.2	48.1	54.6	8.1	▲ 33.1%
デンマーク	7.2	16.4	36.0	35.2	4.6	▲ 52.8%
米国	8.6	24.5	69.6	39.8	3.0	▲ 77.9%
カナダ	16.0	17.2	41.1	23.6	2.7	▲ 68.5%
オランダ	8.5	16.0	26.5	27.7	2.6	▲ 75.9%
その他	42.0	64.9	115.8	66.8	7.8	▲ 63.4%
合計	119.3	199.4	430.4	357.4	41.2	▲ 63.9%

資料：「Global Trade Atlas」
注：HSコードは0203。

（調査情報部　海老沼　一出）

牛乳・乳製品

E U

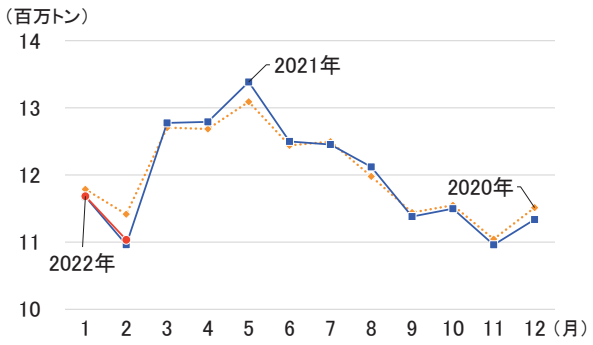
生乳取引価格、過去最高値を更新

２月の生乳出荷量、前年同月比0.7%増

欧州委員会によると、2022年２月の生乳出荷量（EU27カ国）は、1103万5500トン（前年同月比0.7%増）と前年同月をわずかに上回った（図１、表）。

同月の生乳出荷量を国別に見ると、イタリア（同1.9%増）、ポーランド（同4.3%増）、スペイン（同0.5%増）など主要国の多くが前年同月を上回った一方で、上位のドイツ（同

図１　生乳出荷量の月別推移



資料：欧州委員会「Eurostat」
注１：直近月は速報値。
注２：データが未公表のルクセンブルグは除く。

表　主要生産国別生乳出荷量の推移

（単位：千トン）

	2021年２月	2022年２月	前年同月比（増減率）	2022年（１～２月）	前年同期比（増減率）
ドイツ	2,498	2,484	▲ 0.6%	5,159	▲ 1.3%
フランス	1,940	1,937	▲ 0.1%	4,042	▲ 0.1%
オランダ	1,082	1,065	▲ 1.5%	2,221	▲ 2.1%
イタリア	1,010	1,029	1.9%	2,126	3.2%
ポーランド	964	1,005	4.3%	2,084	3.5%
スペイン	583	585	0.5%	1,216	1.2%
デンマーク	429	438	2.0%	915	1.0%
アイルランド	363	366	0.8%	547	▲ 0.7%
ベルギー	344	350	1.7%	726	1.3%
その他	1,750	1,775	1.5%	3,683	1.1%
合計	10,962	11,036	0.7%	22,719	0.4%

資料：欧州委員会「Eurostat」
注１：速報値。
注２：データが未公表のルクセンブルグは除く。

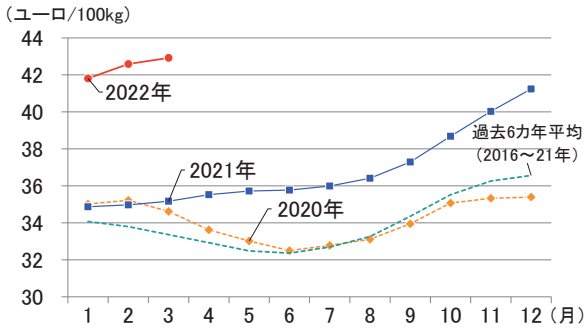
0.6%減）、フランス（同0.1%減）、オランダ（同1.5%減）はいずれも下回った。

欧州委員会は、４月５日に公表した農畜産物の短期的需給見通しの中で、乳用牛飼養頭数が減少傾向で推移していることから、生乳出荷量の増加には１頭当たりの乳量の増加が必要としている。しかし、飼料価格が上昇しているため、購入飼料依存型の経営にあってはその増加は限定的となる。そのため、1頭当たりの乳量が前年比1.0%増とわずかな上昇にとどまり、乳用牛飼養頭数が同1.0%減と見込まれることから、22年の生乳出荷量は前年並みと見込まれている。

乳製品価格は引き続き上昇傾向

欧州委員会によると、2022年３月の生乳取引価格（EU27カ国の平均）は、100キログラム当たり43.48ユーロ（5971円：１ユーロ＝137.33円(注)、前年同月比23.6%高）と先月に引き続き過去最高値を更新した（図２）。前述の同見通しの中で、生乳取引価格の上昇

図２　生乳取引価格の推移



資料：欧州委員会「Milk market observatory」
注１：直近月は推定値。
注２：データが未公表のルクセンブルグを除く。

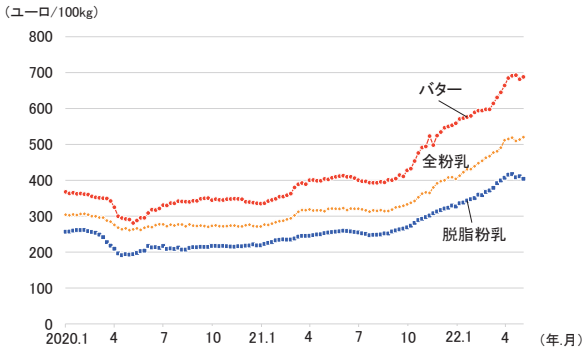
要因として、生乳の供給がタイトとなる一方で、中国からの輸入需要が強いこと、また、粉乳以外にも外食産業向けのチーズとクリームの需要が堅調であることが挙げられている。さらに、短期的には同価格の上昇傾向は続くとしながらも、獣医サービスなどの投入コストの上昇が顕著なことから、生産者の収益は圧迫されると見込まれている。

生乳取引価格に影響する直近の５月８日の週の乳製品価格を見ると、バターが100キ

ログラム当たり688ユーロ（９万4483円）、脱脂粉乳が同407ユーロ（５万5893円）、全粉乳が同520ユーロ（７万1274円）といずれも高水準で推移している（図３）。現地情報によると、乳製品在庫が減少する中で、第１四半期の生乳出荷量は前年を下回る見込みであり、乳製品の供給量の増加が見込まれないことが、乳製品価格が高水準で推移する要因であるとしている。

（注）　三菱UFJリサーチ＆コンサルティング株式会社「月末・月中平均の為替相場」の2022年４月末TTS相場。

図３　乳製品価格の推移



資料：欧州委員会「Milk market observatory」

（調査情報部　小林　智也）

豪　州

生乳生産量、９カ月連続で前年同月比減

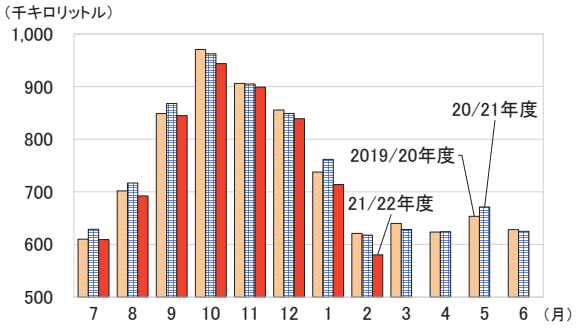
降雨などから生乳生産量は低迷

デーリー･オーストラリア（DA）によると、2022年２月の生乳生産量は酪農主産地のビクトリア州などで減少した結果、58万296キロリットル（59万7705トン相当、前年同月比6.1%減）とかなりの程度減少した（図１）。

豪州の生乳生産量は、ラニーニャ現象に伴う降雨が牧草の品質低下を招いたことや、夏季の高温多湿や飼養頭数の減少などから、21年６月以降、前年同月を下回って推移している[注1]。21/22年度（７月～翌６月）の２月までの累計でも、612万2112キロリットル（630万5776トン相当、前年同期比3.0%減）と低迷している。

今年度の生乳生産量についてDAは、年度開始直前の21年６月時点では前年度比０～２％増と見込んでいたが、22年３月には同１～３％減の859万~877万キロリットル（885万~903万トン相当）と下方修正した。また、豪州農業資源経済科学局（ABARES）も同月、今年度の生乳生産量は877万キロリットル（同1.0%減）との見込みを公表した[注2]。

図１　生乳生産量の推移



資料：DA
注：年度は７月～翌６月。

（注１）　海外情報「2021/22年度の生乳生産見通し、収益は改善も生産は伸び悩み（豪州）」（https://www.alic.go.jp/chosa-c/joho01_002999.html）」を参照されたい。
（注２）　本稿で紹介するABARESの予測についての詳細は、『畜産の情報』2022年５月号「豪州の農畜産物需給見通し~2022年豪州農業需給観測会議などから～」（https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_002169.html）を参照されたい。

当初乳価、22/23年度も高水準か

豪州では、生乳生産量の減少により乳業各社の生乳確保競争が激化しており、

ABARESは、生乳確保を目指す乳業の思惑から2022/23年度の当初乳価(注3)は過去最高額になると予測している。現地報道によると、22年４月に先陣を切って当初乳価を公表したベガチーズは、同社の当初乳価として過去最高の生乳の固形分(注4)１キログラム当たり8.40豪ドル(注5)(787円：１豪ドル＝93.70円(注6))を提示した。

なお、オランダの農協系金融機関ラボバンクも同様に高水準（豪州南部で同8.40豪ドル)を予測しているが、投入コストの上昇により酪農家の収益は圧迫されると指摘している。

（注３） 年度当初に乳業各社などが設定する生産者支払乳価の最低価格。「酪農業界における行動規範（Dairy code of conduct)」に基づき、毎年６月１日までの公表が義務付けられている。
（注４） 乳脂肪分および乳たんぱく質。
（注５） 同社に全量出荷するビクトリア州およびリベリナ地方の酪農家に対する当初乳価。
（注６） 三菱UFJリサーチ＆コンサルティング株式会社「月末・月中平均の為替相場」の2022年４月末TTS相場。

バターおよびバターオイルとチーズの輸出量は減少

DAが発表した2022年２月の主要乳製品４品目の輸出量は、脱脂粉乳と全粉乳がインドネシアやベトナムなどアジア向け輸出の伸びなどを受けて増加した。一方、バターおよびバターオイルとチーズは主要輸出先である中国向けの不振などを受け大幅に減少した（表、図２)。

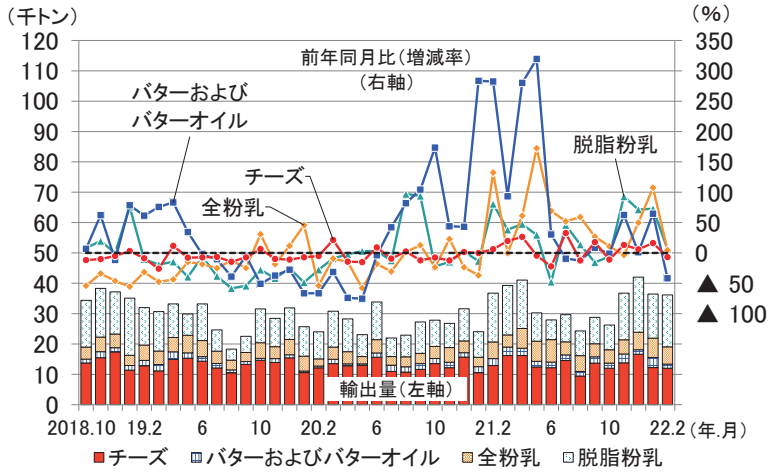
表　乳製品輸出量の推移

（単位：トン）

品目	2021 2月	2022年 2月	前年同月比（増減率）	2021/22年度（７月～翌２月）	前年同期比（増減率）
脱脂粉乳	16,117	17,122	6.2 %	99,146	31.5 %
全粉乳	5,447	5,699	4.6 %	40,732	32.8 %
バターおよびバターオイル	2,319	1,352	▲ 41.7 %	16,187	8.1 %
チーズ	12,887	12,000	▲ 6.9 %	104,378	6.3 %

資料：DA
注：製品重量ベース。

図２　乳製品輸出量および前年同月比（増減率）の推移



資料：DA
注：製品重量ベース。

（調査情報部　阿南　小有里）

N　Z

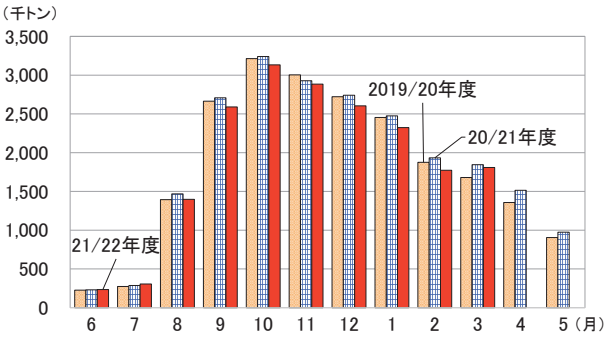
2021/22年度の生乳生産量、前年度を下回る見通し

３月の生乳生産量、８カ月連続で前年同月を下回る

ニュージーランド乳業協会（DCANZ）によると、2022年３月の生乳生産量は180万9000トン（前年同月比1.9%減）と８カ月連続で前年同月を下回った（図１）。また、21/22年度（６月～翌５月）の３月までの累計でも、1905万3400トン（前年同期比4.0%減）と減少した。

ニュージーランド証券取引所（NZX）は、３月の生乳生産量は前年同月割れと見込んでいた中で、２月中旬の降雨により牧草の成育が進み、減少幅は縮小したとしている。また、今期（21/22年度）の見通しとして、乾燥した気候から牧草生育への影響が続くことで、生乳生産量は前年度を下回るとしている。

図１　生乳生産量の推移



資料：DCANZ
注：年度は６月～翌５月。

乳製品輸出量、全粉乳を除く主要３品目が前年同月を上回る

ニュージーランド統計局（Stats　NZ）によると、2022年３月の乳製品輸出量は、主要３品目が前年同月を上回った（表、図２）。

品目別に見ると、脱脂粉乳は、最大の輸出先である中国向けが前年同月比で１割程度減少したものの、フィリピンやマレーシア向けなどがそれぞれ大幅に増加したことで、全体では大幅に増加した。全粉乳は、最大の輸出先である中国向けの大幅な減少などを受けて、全体でも大幅に減少した。また、バターおよびバターオイルは、米国向けがかなり大きく減少したものの、最大の輸出先である中国向けがかなりの程度増加したことで、全体ではやや増加した。チーズは、最大の輸出先である中国向けがかなり大きく減少したものの、輸出量第２位の日本向けの大幅な増加で、全体ではかなりの程度増加した。

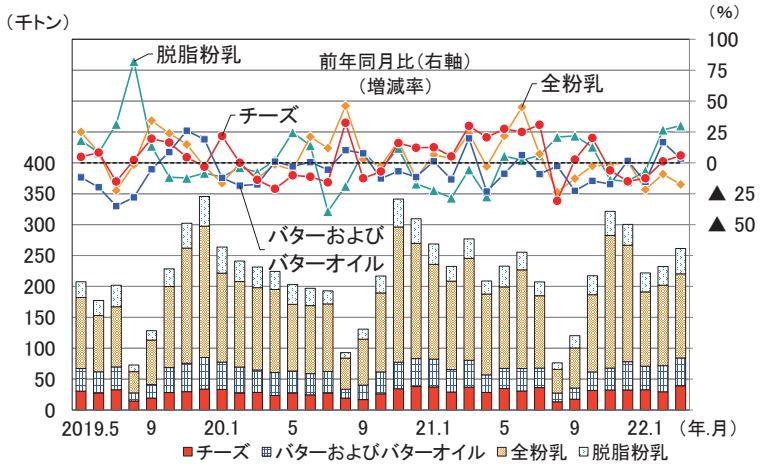
表　乳製品輸出量の推移

（単位：トン）

品目	2021年３月	2022年３月	前年同月比（増減率）	2021/22年度７月～翌３月	前年同期比（増減率）
脱脂粉乳	31,554	41,068	30.2 %	258,484	4.8 %
全粉乳	164,990	136,205	▲ 17.4 %	1,134,879	▲ 7.6 %
バターおよびバターオイル	43,478	44,971	3.4 %	300,521	▲ 6.2 %
チーズ	37,042	39,249	6.0 %	264,998	▲ 0.6 %

資料：Stats NZ
注１：HSコードは、脱脂粉乳が0402.10、全粉乳が0402.21と0402.29、バターおよびバターオイルが0405.10と0405.90、チーズが0406。
注２：製品重量ベース。
注３：年度は７月～翌６月。

図２　乳製品輸出量および前年同月比（増減率）の推移



資料：Stats NZ
注：製品重量ベース。

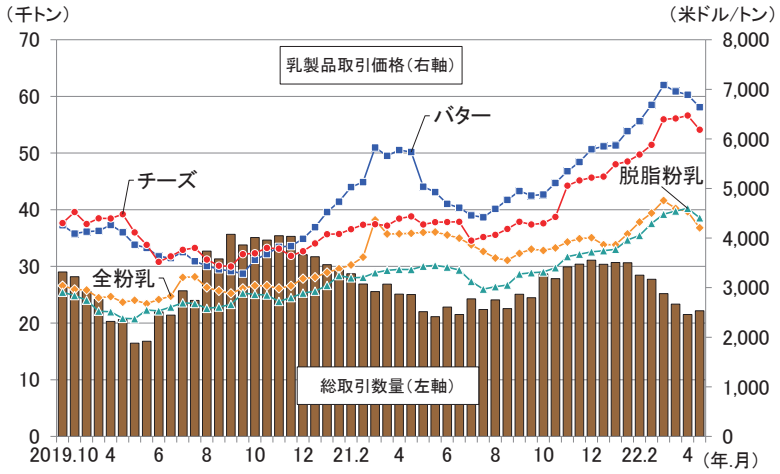
GDT、主要４品目いずれも前回より下落

2022年４月19日に開催されたグローバルデイリートレード（注１）の総取引量は前回よりも増加したが、平均取引価格は、主要４品目いずれも前回から下落した（図３）。

品目別に見ると、脱脂粉乳は北アジア（注２）やアフリカなどの需要が強かったものの、東南アジアからの引き合いが弱く前回よりやや下落した。また、全粉乳も北アジアや東南アジアからの引き合いが弱くかなりの程度下落した。一方、バターは、東南アジアからの引き合いが強かったことで、前回から下落したものの引き続き高値で推移している。また、チーズも同様に、東南アジアからの引き合いが強かったことで同じく下落したものの、高値で推移している。

（注１）　月２回開催されるフォンテラ社主催の電子オークション。乳製品の国際価格の指標とされている。
（注２）　ニュージーランド外務貿易省は、中国、日本、香港、韓国、台湾を北アジアとしている。

図３　GDTの乳製品取引価格と総取引数量の推移



資料：GDT

（調査情報部　廣田　李花子）

飼料穀物

世　界

ブラジルなどの上方修正で、世界のトウモロコシ生産量は引き続き過去最高の見通し

米国農務省世界農業観測ボード（USDA/WAOB）および米国農務省海外農業局（USDA/FAS）は2022年４月８日、2021/22年度の世界のトウモロコシ需給予測値を更新した（表）。

これによると、世界のトウモロコシ生産量は12億1045万トン（前年度比7.5%増）と前月から431万トン上方修正され、引き続き過去最高の生産が見込まれている。最大の生産国である米国、第２位の中国は、いずれも前月から据え置かれたが、第３位のブラジルは、第２期作の作付面積の拡大を受けて200万トン上方修正され、過去最高の生産量が見込まれている。第４位のEUも、ドイツ、ルーマニア、チェコでの生産量増加により、70万トン上方修正され、同5.0%増と見込まれている。なお、第５位のウクライナは、前月から据え置かれたものの、同38.3%増と見込まれている。

輸出量は、世界全体で１億9700万トン（同8.2%増）とかなりの程度増加が見込まれているが、前月から290万トン下方修正された。うち、ウクライナは黒海沿岸の穀物積出港の港湾機能停止の影響などから450万トン引き下げられ、２カ月連続の下方修正となった。一方で、ブラジルは主に第２期作の増産を背景とした輸出余力の増加により150万トン上方修正された。

輸入量は、世界全体で１億8211万トン（同1.9%減）と前月から352万トン下方修正された。うち、最大の輸入国である中国は、主要輸入先であるウクライナの状況を受けて前月から300万トン下方修正され、2300万トン（同22.1%減）と大幅な減少が見込まれている。

消費量は、世界全体で11億9715万トン（同5.0%増）と前月から53万トン上方修正され、引き続き前年度を上回ると見込まれている。うち、最大の消費国である中国は２億9100万トン（同2.1%増）と前月から300万トン下方修正された。

この結果、期末在庫は３億546万トン（同4.6%増）と前月から449万トン上方修正され、前年度をやや上回ると見込まれている。

表　主要国のトウモロコシの需給見通し（2022年４月８日米国農務省公表）

（単位：百万トン）

区　　分		2019/20年度	2020/21年度	2021/22年度		
			（推計値）	（３月予測）	（４月予測）	前年度比（増減率）
米国						
	期首在庫	56.41	48.76	31.36	31.36	▲ 35.7%
	生産量	345.96	358.45	383.94	383.94	7.1%
	輸入量	1.06	0.62	0.64	0.64	3.2%
	消費量	309.55	306.54	315.86	315.86	3.0%
	輸出量	45.13	69.92	63.50	63.50	▲ 9.2%
	期末在庫	48.76	31.36	36.57	36.57	16.6%
アルゼンチン						
	期首在庫	2.37	3.62	1.02	1.18	▲ 67.4%
	生産量	51.00	52.00	53.00	53.00	1.9%
	輸入量	0.00	0.01	0.01	0.01	0.0%
	消費量	13.50	13.50	14.00	14.00	3.7%
	輸出量	36.25	40.94	39.00	39.00	▲ 4.7%
	期末在庫	3.62	1.18	1.03	1.19	0.8%
ブラジル						
	期首在庫	5.31	5.33	4.73	4.65	▲ 12.8%
	生産量	102.00	87.00	114.00	116.00	33.3%
	輸入量	1.66	2.85	2.00	2.00	▲ 29.8%
	消費量	68.50	69.50	72.50	73.00	5.0%
	輸出量	35.14	21.02	43.00	44.50	2.1倍
	期末在庫	5.33	4.65	5.23	5.15	10.8%
ウクライナ						
	期首在庫	0.89	1.48	0.83	0.83	▲ 43.9%
	生産量	35.89	30.30	41.90	41.90	38.3%
	輸入量	0.03	0.02	0.02	0.02	0.0%
	消費量	6.40	7.10	10.90	13.20	85.9%
	輸出量	28.93	23.86	27.50	23.00	▲ 3.6%
	期末在庫	1.48	0.83	4.35	6.55	7.9倍
中国						
	期首在庫	210.18	200.53	205.70	205.70	2.6%
	生産量	260.78	260.67	272.55	272.55	4.6%
	輸入量	7.58	29.51	26.00	23.00	▲ 22.1%
	消費量	278.00	285.00	294.00	291.00	2.1%
	輸出量	0.01	0.00	0.02	0.02	－
	期末在庫	200.53	205.70	210.24	210.24	2.2%
世界計						
	期首在庫	322.41	306.37	291.45	292.15	▲ 4.6%
	生産量	1,120.13	1,125.88	1,206.14	1,210.45	7.5%
	輸入量	167.66	185.60	185.63	182.11	▲ 1.9%
	消費量	1,136.17	1,140.10	1,196.62	1,197.15	5.0%
	輸出量	172.25	182.12	199.90	197.00	8.2%
	期末在庫	306.37	292.15	300.97	305.46	4.6%

資料：USDA/WAOB「World Agricultural Supply and Demand Estimates」
注：各国の穀物年度　世界、米国：９月～翌８月/中国、ウクライナ：10月～翌９月/ アルゼンチン、ブラジル：３月～翌２月。

（調査情報部　塩原　百合子）

南米での大豆減産見通しで、輸出と期末在庫は４カ月連続の下方修正

米国農務省世界農業観測ボード（USDA/WAOB）および米国農務省海外農業局（USDA/FAS）は2022年４月８日、21/22年度の世界の大豆需給予測値を更新した（表）。

これによると、世界の大豆生産量は３億5072万トン（前年度比4.6%減）と前月から308万トン下方修正された。最大の生産国であるブラジルは、同国南部での乾燥気候の影響により前月から200万トン下方修正され、４カ月連続での大幅見直しとなった。また、隣国のパラグアイもブラジルと同様、乾燥気候の影響から引き続き減産が見込まれることで、主にこれら２カ国の減少分が反映される形となった。

輸出量は、世界全体で１億5529万トン（同5.6%減）と前月から334万トン下方修正された。最大の輸出国であるブラジルは、生産量の減少見通しにより同275万トン下方修正されたほか、パラグアイも同70万トン下方修正され、ウクライナとロシアの減少分も加味されている。一方で、米国は同６８万トン上方修正されており、南米の減少分の一部を補う形となった。

輸入量は、世界全体で１億5292万トン（同7.5%減）と前月から381万トン下方修正された。うち、最大の輸入国である中国は、ブラジルなどの輸出量の減少見通しを反映し、9100万トン（同8.8%減）と同300トン下方修正された。

消費量（搾油仕向け）は、世界全体で３億1291万トン（同0.7%減）と前月から235万トン下方修正された。最大の消費国である中国は、輸入量の減少見合い分と同じく8900万トンに下方修正された。

この結果、期末在庫は8958万トン（同13.1%減）と前月から38万トン下方修正された。期末在庫は、中国などの大豆輸入需要の増加を背景に南米などの生産拡大から上昇基調で推移してきたが、21/22年度は15/16年度以来となる8000万トン台への減少が見込まれている。

米国の大豆作付面積は過去最大見込み、中国は備蓄大豆を放出

米国農務省全国農業統計局（USDA/NASS）が３月31日に公表した穀物の作付け予想によると、2022年の大豆の作付面積は9096万エーカー（3681万ヘクタール(注)、前年比4.3%増）と過去最大が見込まれており、トウモロコシの作付面積8949万エーカー（3622万ヘクタール、同4.1%減）を上回るとされている。州別では、全米29州のうち24州で作付面積が前年を上回るとされ、穀物生産が盛んな中部穀倉地帯に位置するアイオワ州、イリノイ州などでは過去最大と予想されている。

一方で中国政府は、国内の大豆価格高騰を受けて４月に入り計250万トン（４月29日時点）の備蓄大豆の放出を公告するとともに、22年の政策として大豆作付面積の拡大を掲げている。

（注）１エーカーは約0.4047ヘクタール。

表　主要国の大豆需給見通し（2022年４月８日米国農務省公表）

（単位：百万トン）

区　　分		2019/20年度	2020/21年度	2021/22年度		
			（推計値）	（３月予測）	（４月予測）	前年度比（増減率）
米国						
	期首在庫	24.74	14.28	6.99	6.99	▲ 51.1%
	生産量	96.67	114.75	120.71	120.71	5.2%
	輸入量	0.42	0.54	0.41	0.41	▲ 24.1%
	消費量	58.91	58.26	60.28	60.28	3.5%
	輸出量	45.70	61.52	56.88	57.56	▲ 6.4%
	期末在庫	14.28	6.99	7.77	7.07	1.1%
ブラジル						
	期首在庫	33.34	20.42	27.95	29.40	44.0%
	生産量	128.50	139.50	127.00	125.00	▲ 10.4%
	輸入量	0.55	1.02	0.45	0.45	▲ 55.9%
	消費量	46.74	46.68	46.25	47.25	1.2%
	輸出量	92.14	81.65	85.50	82.75	1.3%
	期末在庫	20.42	29.40	21.00	21.61	▲ 26.5%
アルゼンチン						
	期首在庫	28.89	26.65	25.06	25.06	▲ 6.0%
	生産量	48.80	46.20	43.50	43.50	▲ 5.8%
	輸入量	4.88	4.82	2.90	2.20	▲ 54.4%
	消費量	38.77	40.16	40.00	40.00	▲ 0.4%
	輸出量	10.00	5.20	2.75	2.75	▲ 47.1%
	期末在庫	26.65	25.06	21.50	20.80	▲ 17.0%
中国						
	期首在庫	19.46	26.79	34.48	34.48	28.7%
	生産量	18.09	19.60	16.40	16.40	▲ 16.3%
	輸入量	98.53	99.76	94.00	91.00	▲ 8.8%
	消費量	91.50	93.00	92.00	89.00	▲ 4.3%
	輸出量	0.09	0.07	0.10	0.10	42.9%
	期末在庫	26.79	34.48	33.08	33.08	▲ 4.1%
世界計						
	期首在庫	115.24	96.84	101.74	103.11	6.5%
	生産量	339.97	367.76	353.80	350.72	▲ 4.6%
	輸入量	165.12	165.38	156.73	152.92	▲ 7.5%
	消費量	312.31	315.00	315.26	312.91	▲ 0.7%
	輸出量	165.17	164.48	158.63	155.29	▲ 5.6%
	期末在庫	96.84	103.11	89.96	89.58	▲ 13.1%

資料：USDA/WAOB「World Agricultural Supply and Demand Estimates」
注１：各国の穀物年度　米国：９月～翌８月／ブラジル、アルゼンチン、中国：10月～翌９月。
注２：消費量は搾油仕向量である。

（調査情報部　横田　徹）

米　国

トウモロコシ期末在庫率、引き続き９％台に据え置き

USDA/WAOBは2022年４月８日、21/22年度（９月～翌８月）の米国の主要農作物需給予測値を更新した。このうち、同国のトウモロコシ需給見通しは次の通りである（表）。

生産量は、前月から据え置かれ、151億1500万ブッシェル（３億8394万トン(注1)、前年度比7.1％増）と、これまでの統計で最も生産量の多かった16/17年度の151億4800万ブッシェル（３億8477万トン）に近い水準となっている。

消費量は、飼料など向けが2500万ブッシェル下方修正されたものの、エタノール向けが前月から2500万ブッシェル上方修正されたため、全体では124億3500万ブッシェル（３億1586万トン、同3.0％増）と前月から据え置かれた。引き続き、原油高を背景にエタノール向け需要の増加（同6.8％増）が消費をけん引すると見込まれている。

輸出量は、前月と同様、米国がウクライナの輸出減を補うとの見込みから25億ブッシェル（6350万トン、同9.2％減）と据え置かれ、記録的な輸出量となった前年度からは、かなりの程度の減少が見込まれている。

この結果、期末在庫は、14億4000万ブッシェル（3657万トン、同16.6％増）と前月から据え置かれた。

また期末在庫率（総消費量に対する期末在庫量）も9.6％（同1.3ポイント増）と前月と変わらず10％台を割り込んだ。

表　米国のトウモロコシの需給見通し（2022年４月８日米国農務省公表）

区　分	ー単位ー	2019/20年度	2020/21年度（推計値）	2021/22年度（３月予測）	2021/22年度（４月予測）	2021/22年度 参考（換算値）	前年度比（増減率）
作付面積	（百万エーカー）	89.7	90.7	93.4	93.4	37.8（百万ヘクタール）	3.0%
収穫面積	（百万エーカー）	81.3	82.3	85.4	85.4	34.6（百万ヘクタール）	3.8%
単収	（ブッシェル/エーカー）	167.5	171.4	177.0	177.0	11.1（トン/ヘクタール）	3.3%
生産量	（百万ブッシェル）	13,620	14,111	15,115	15,115	383.94（百万トン）	7.1%
輸入量	（百万ブッシェル）	42	24	25	25	0.64（百万トン）	4.2%
期首在庫	（百万ブッシェル）	2,221	1,919	1,235	1,235	31.36（百万トン）	▲35.6%
総供給量	（百万ブッシェル）	15,883	16,055	16,375	16,375	415.94（百万トン）	2.0%
国内消費量	（百万ブッシェル）	12,186	12,068	12,435	12,435	315.86（百万トン）	3.0%
飼料など向け	（百万ブッシェル）	5,900	5,598	5,650	5,625	142.88（百万トン）	0.5%
食品・種子・その他工業向け	（百万ブッシェル）	6,286	6,470	6,785	6,810	172.98（百万トン）	5.3%
うちエタノール向け	（百万ブッシェル）	4,857	5,033	5,350	5,375	136.53（百万トン）	6.8%
輸出量	（百万ブッシェル）	1,777	2,753	2,500	2,500	63.50（百万トン）	▲9.2%
総消費量	（百万ブッシェル）	13,963	14,821	14,935	14,935	379.36（百万トン）	0.8%
期末在庫	（百万ブッシェル）	1,919	1,235	1,440	1,440	36.57（百万トン）	16.6%
期末在庫率	（%）	13.7	8.3	9.6	9.6		1.3ポイント増
生産者平均販売価格	（米ドル/ブッシェル）	3.56	4.53	5.65	5.80	29.7（円/kg）	28.0%

資料：USDA/WAOB「World Agricultural Supply and Demand Estimates」
注１：年度は各年９月～翌８月。
注２：１エーカーは約0.4047ヘクタール。

生産者平均販売価格は、１ブッシェル当たり5.80米ドル（753円。１キログラム当たり29.7円：１米ドル＝129.86円(注2)）と前月からやや上方修正された。

なお、米国農務省全国農業統計局（USDA/NASS）が３月31日に公表した穀物の作付け予想によると、22年のトウモロコシの作付面積は8949万エーカー（3622万ヘクタール、前年比4.1%減）で、大豆の作付面積9096万エーカー（3681万ヘクタール、同4.3%増）を下回ると見込まれている。サウスダコタ州やネバダ州では過去最高の作付面積が見込まれるものの、48州中43州の作付面積は据え置きまたは縮小すると予想されている。

（注１）　１ブッシェルを約25.401キログラムとして農畜産業振興機構が換算。
（注２）　三菱UFJリサーチ＆コンサルティング株式会社「月末・月中平均の為替相場」の2022年４月末TTS相場。

（調査情報部　塩原　百合子）

中　国

2021/22年度のトウモロコシ、大豆の需給見通し

トウモロコシの生産量は初の２億7000万トン台に到達

中国農業農村部は４月８日、2021/22年度（10月～翌９月）の中国の農産物需給状況分析を公表した。このうち、同国のトウモロコシ需給見通しは次の通りである（表１）。

作付面積、収穫面積はいずれも4332万4000ヘクタール（前年度比5.0%増）と前月から据え置かれた。また、生産量は、単収の減少が見込まれるものの、作付面積の増加などから２億7255万トン（同4.6%増）と同じく前月から据え置かれたが、初の２億7000万トン台に到達する。

輸入量は、2000万トン（同32.3%減）と前月から据え置かれた。記録的な輸入となった前年度から大幅な減少が見込まれている。

消費量は、２億8770万トン（同2.0%増）とわずかな増加が見込まれているが、引き続き、消費の６割強を占める飼料向け需要が消費をけん引するとみられている。

この結果、同年度のトウモロコシの過不足は483万トン（同40.1%減）と２年連続でのプラスとされている。

また、国内のトウモロコシ生産地平均卸売価格は、１トン当たり2400~2600元（４万7664円～５万1636円：１元＝19.86円(注)）と前月から据え置かれたが、引き続き高い水準で推移している。

表１　中国のトウモロコシ需給見通し（2022年４月８日中国農業農村部公表）

区　分	ー単位ー	2019/20年度	2020/21年度	2021/22年度		
			(推計値)	(３月予測)	(４月予測)	前年度比（増減率）
作付面積	(千ヘクタール)	41,284	41,264	43,324	43,324	5.0%
収穫面積	(千ヘクタール)	41,284	41,264	43,324	43,324	5.0%
単収	(キログラム/ヘクタール)	6,316	6,317	6,291	6,291	▲ 0.4%
生産量	(万トン)	26,077	26,066	27,255	27,255	4.6%
輸入量	(万トン)	760	2,956	2,000	2,000	▲ 32.3%
総供給量（生産量＋輸入量）	(万トン)	26,837	29,022	29,255	29,255	0.8%
消費量	(万トン)	27,830	28,216	28,770	28,770	2.0%
食用向け	(万トン)	943	955	965	965	1.0%
飼料向け	(万トン)	17,400	18,000	18,600	18,600	3.3%
工業向け	(万トン)	8,200	8,000	8,000	8,000	0.0%
種子向け	(万トン)	187	187	195	195	4.3%
その他向け	(万トン)	1,100	1,074	1,010	1,010	▲ 6.0%
輸出量	(万トン)	1	0	2	2	ー
総消費量（消費量＋輸出量）	(万トン)	27,831	28,216	28,772	28,772	2.0%
差引数量（総供給量ー総消費量）	(万トン)	▲ 994	806	483	483	▲ 40.1%

資料：中国農業農村部
注：年度は10月～翌９月。

大豆の生産量は大幅な減少見込み、高価格から備蓄大豆の放出を開始

また、同国の大豆の需給見通しは次の通りである（表２）。

作付面積、収穫面積はいずれも840万ヘクタール（前年度比15.0%減）と前月から据え置かれた。また、生産量は、作付面積などの減少に加え、単収の減少から1640万トン（同16.3%減）と見込まれている。

輸入量は、１億200万トン（同2.2%増）と前月から据え置かれたが、記録的な輸入となった前年度からの増加が見込まれている。

消費量は、１億1808万トン（同4.3%増）とやや増加が見込まれ、引き続き、１億トンを超過する搾油向け需要が消費をけん引するとみられている。

この結果、同年度の大豆の過不足は17万トン（同97.2%減）とプラスながらも前年度からの大幅な減少とされている。

また、国内の大豆平均卸売価格は、１トン当たり5800~6000元（11万5188円~11万9160円）と前月から据え置かれたが、引き続き高い水準で推移している。

高水準で推移する大豆価格に対処するため、中国政府は４月に入り計250万トン（４月29日時点）の備蓄大豆（いずれも2019年産の輸入大豆）の放出を公告した。また、同政府は、22年の政策課題として大豆作付面積の拡大を掲げており、今春の作付け状況が明らかになるにつれ、需給見通しの上方修正が行われる可能性が出ている。

米国農務省の資料によると、21/22年の世界の大豆在庫は前年度からの減少が見込まれているが、他方で中国の在庫は比較的高い水準にある（図）。このため、今後、中国国内の大豆価格の動向によっては、さらなる備蓄大豆の放出も見込まれる。

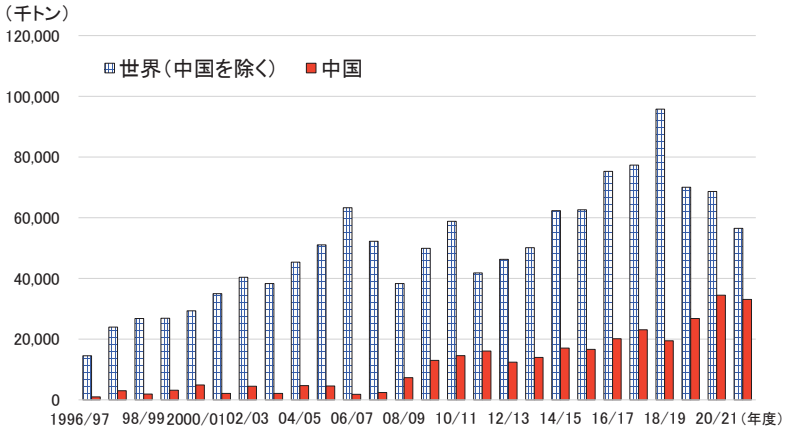
（注）　三菱UFJリサーチ＆コンサルティング株式会社「月末・月中平均の為替相場」の2022年４月末TTS相場。

表２　中国の大豆需給見通し（2022年４月８日中国農業農村部公表）

区　分	ー単位ー	2019/20年度	2020/21年度	2021/22年度		
			(推計値)	(３月予測)	(４月予測)	前年度比（増減率）
作付面積	（千ヘクタール）	9,354	9,882	8,400	8,400	▲ 15.0%
収穫面積	（千ヘクタール）	9,354	9,882	8,400	8,400	▲ 15.0%
単収	（キログラム/ヘクタール）	1,935	1,983	1,950	1,950	▲ 1.7%
生産量	（万トン）	1,810	1,960	1,640	1,640	▲ 16.3%
輸入量	（万トン）	9,853	9,978	10,200	10,200	2.2%
総供給量（生産量＋輸入量）	（万トン）	11,663	11,938	11,840	11,840	▲ 0.8%
消費量	（万トン）	10,860	11,326	11,808	11,808	4.3%
搾油向け	（万トン）	9,100	9,500	10,047	10,047	5.8%
食用向け	（万トン）	1,380	1,420	1,355	1,355	▲ 4.6%
種子向け	（万トン）	80	76	76	76	0.0%
その他向け	（万トン）	300	330	330	330	0.0%
輸出量	（万トン）	9	6	15	15	150.0%
総消費量（消費量＋輸出量）	（万トン）	10,869	11,332	11,823	11,823	4.3%
差引数量（総供給量－総消費量）	（万トン）	794	606	17	17	▲ 97.2%

資料：中国農業農村部
　注：年度は10月～翌９月。

図　世界の大豆在庫の推移



資料：USDA/PS&Dの資料を基に機構作成

参考：中国農業農村部の「農産物需給動向分析月報（2022年３月）」の公表時期の関係から、今号では中国のトウモロコシおよび大豆の月別価格動向は掲載していない。

（調査情報部　横田　徹）